

ISSN 1341-6189

特定非営利活動法人 日本医学図書館協会主催・日本薬学図書館協議会協賛

第21回医学図書館研究会・継続教育コース プログラム・予稿集

会期：2014年11月19日（水）～21日（金）

会場：聖マリアンナ医科大学 病院講堂

第21回医学図書館研究会・継続教育コース

「つながる－つたえる－図書館の“わ”」

2014年11月19日（水）～21日（金）

聖マリアンナ医科大学 病院講堂

特定非営利活動法人 日本医学図書館協会主催・日本薬学図書館協議会協賛

目 次

第 21 回医学図書館研究会・継続教育コース開催にあたって	1
医学図書館研究会プログラム	5
研究会 1. China Medical Boardが戦後日本の医学図書館の発展に果たした役割・ 松村悠子(長崎大学附属図書館医学分館)	6
研究会 2. 医学中央雑誌にみる恩賜財団済生会 100 年(第 3 報)・ 高崎千晶(恩賜財団済生会川口総合病院図書室)	8
研究会 3. 研究業績データベース学外公開のプロセス・ 山岸なおみ(東京女子医科大学図書館)	10
研究会 4. 信濃町メディアセンターにおけるコレクション管理: 増えゆく蔵書への対応・ 吉沢亜季子(慶應義塾大学信濃町メディアセンター)	12
研究会 5. 新しい世代の図書館を目指せ!: 東京医科大学図書館本館の新築移転事例報告・ 高畑亜紗美(東京医科大学図書館)	14
研究会 6. 信州大学附属図書館における、夜間・休日開館中の臨時閉館の 決定と周知について・ 折井 匡(信州大学附属図書館中央図書館)	16
研究会 7. 愛知医科大学における看護系利用者の段階的行動と指標の可能性・ 福武 亨, 小林晴子(愛知医科大学医学情報センター)	18
研究会 8. 患者図書室のための新聞医療記事分類・評価の試み・ 佐藤正恵	20
研究会 9. システマティック・レビューにおいて検索に用いられるデータベース: Cochrane Database of Systematic Reviewsの分析結果から・ 佐山暁子(東邦大学医学メディアセンター)	22
研究会 10. Nature Publishing GroupのAODサービス分析・ 橋本郷史(東邦大学医学メディアセンター)	24
研究会 11. 自作SUSHIクライアントによる電子ジャーナル利用統計 取得業務の改善・ 廣瀬 洋(埼玉医科大学附属図書館)	26

継続教育コースプログラム	31
継続教育コース 1「文献検索演習 中級編」	
医中誌Web	32
講師：大屋玲奈氏(獨協医科大学図書館)	
PubMed	34
講師：小嶋智美氏(個人会員)	
継続教育コース 2「科学におけるモラルを考える」	
演題「論文執筆から発表倫理を考える」	36
講師：山崎茂明氏(愛知淑徳大学人間情報学部教授)	
演題「質的研究における研究者のモラルー真実性と転移可能性の確保ー」	38
講師：萱間真美氏(聖路加国際大学看護学部教授)	

第 21 回医学図書館研究会・継続教育コースの開催にあたって

昨年、長い公共図書館勤務を経て、退職まで指折り数えられる歳になって初めて足を踏み入れた医学図書館の世界ですが、大きな驚きがありました。それは医学図書館員の方々が大変研究熱心であること、そしてそれに応える研修会や研究発表の機会が数多く用意されていることです。今回の会はその中でも全国から参加者が集まる貴重な機会ではないかと思います。

今年度は会場の都合もあり、プログラムの順番は昨年度とは異なっています。まず、1 日目 11 月 19 日（水）に午後より継続教育コース 1 として文献検索演習を行います。例年行っている「医中誌 Web」と「PubMed」についての中級レベルの研修で、講師には新進気鋭の 2 名の方をお願いしました。

2 日目 20 日（木）は 1 日かけて研究会を行います。今回のテーマは「つながる一つたえる一図書館の“わ”」ということで 11 名の方より発表いただくこととなりました。内容は歴史的な内容のものから、図書館の管理運営に関する問題、利用者の利用行動に関するもの、新聞記事やデータベース、電子ジャーナルといったコンテンツの分析に関するものなど、多彩な内容を取りそろえることができました。研究会終了後は、会場館である聖マリアンナ医科大学医学情報センターの見学会と、懇親会の開催も予定されています。

そして最終日 21 日（金）午前中に継続教育コース 2 を行います。テーマは「科学におけるモラルを考える」ということで 2 名の方にご講演をいただくこととなりました。今年は STAP 細胞の論文不正をめぐって研究倫理の問題がホットな話題を提供していますが、今回のテーマは時宜にかなったものではないかと思います。講師にはこの問題についての第一人者の方をお呼びすることができました。

この会に多くの方にご参加いただき、大いに学び、交流をしていただき、職場や学校、地域に元気を持って帰っていただくことを実行委員一同願っております。

特定非営利活動法人 日本医学図書館協会 主催
日本薬学図書館協議会 協賛
第 21 回医学図書館研究会・継続教育コース
実行委員会委員長 中裕 佳男

第21回医学図書館研究会

「つながる－つたえる－図書館の“わ”」

期日：2014年11月20日（木）

会場：聖マリアンナ医科大学 病院講堂

医学図書館研究会 プログラム

「つながるーつたえるー図書館の“わ”」

期日：2014 年 11 月 20 日（木）

会場：聖マリアンナ医科大学 病院講堂

●11 月 20 日（木）

- 9:30 開場・受付
- 10:00～10:25 1. China Medical Boardが戦後日本の医学図書館の発展に果たした役割
松村悠子(長崎大学附属図書館医学分館)
- 10:25～10:50 2. 医学中央雑誌にみる恩賜財団済生会 100 年（第 3 報）
高崎千晶(恩賜財団済生会川口総合病院図書室)
- 10:50～11:15 3. 研究業績データベース学外公開のプロセス
山岸なおみ(東京女子医科大学図書館)
- 11:15～11:40 4. 信濃町メディアセンターにおけるコレクション管理：
増えゆく蔵書への対応
吉沢亜季子(慶應義塾大学信濃町メディアセンター)
- 11:40～13:00 <休 憩>
- 13:00～13:25 5. 新しい世代の図書館を目指せ！：
東京医科大学図書館本館の新築移転事例報告
高畑亜紗美(東京医科大学図書館)
- 13:25～13:50 6. 信州大学附属図書館における、夜間・休日開館中の臨時閉館の
決定と周知について
折井 匡(信州大学附属図書館中央図書館)
- 13:50～14:15 7. 愛知医科大学における看護系利用者の段階的行動と指標の可能性
福武 亨，小林晴子(愛知医科大学医学情報センター)
- 14:15～14:40 8. 患者図書室のための新聞医療記事分類・評価の試み
佐藤正恵
- 14:40～14:55 <休 憩>
- 14:55～15:20 9. システマティック・レビューにおいて検索に用いられるデータベース：
Cochrane Database of Systematic Reviewsの分析結果から
佐山暁子(東邦大学医学メディアセンター)
- 15:20～15:45 10. Nature Publishing GroupのAODサービス分析
橋本郷史(東邦大学医学メディアセンター)
- 15:45～16:10 11. 自作SUSHIクライアントによる電子ジャーナル利用統計
取得業務の改善
廣瀬 洋(埼玉医科大学附属図書館)
- 16:10～16:20 参加証明書授与・閉会
- 16:20～17:00 聖マリアンナ医科大学図書館見学

China Medical Board が戦後日本の医学図書館の発展に果たした役割

松村悠子

長崎大学附属図書館医学分館

1. はじめに

China Medical Board (以下、CMB) は、元はアメリカのロックフェラー財団の一部門だったが、1914 年に中国の Medical College in Peking (後の Peking Union Medical College=PUMC) の援助を目的として設立した組織である。

1951 年に、CMB は中国国内における共産党の台頭によって PUMC への援助ができなくなったため、援助先をアジア全域の医学・看護学教育に広げた。こうした流れの中で、1952 年から 74 年にかけて、戦後の復興途中にあった日本の医学教育界も支援を受けた。

2. CMB による援助

CMB によって日本の医学図書館に対して行われた援助は、Books and Journals (資料の寄贈)、Construction and equipment (図書館建設・増改築・内部設備)、Fellowship program (留学) の 3 種類であった。

(1) Books and Journals

国内の医学図書館 20 館に対して、CMB から新刊書の寄贈が継続して行われた。

(2) Construction and equipment

1956 年から 63 年にかけて、9 館の医学図書館における図書館建設・増改築に際して、内部設備費などの資金援助が 11 回行われた。

(3) Fellowship program

1963 年から 68 年にかけて、沙藤隆茂 (九州大学)、前田正三 (長崎大学)、渋谷喜雄 (神戸医科大学)、今村慶之助 (東京大学) の 4 名の医学図書館員が、CMB の援助を受けて国内ないし海外に 4 ヶ月から 1 年間留学した。

3. 主要参考文献

- ・ Fukudome, T. (1968). The China Medical Board and medical libraries in the Far East. Bulletin of the Medical Library Association, 56(2), 150-156.
- ・ Laurie Norris. (2003). the china medical board: 50 years of programs, partnerships, and progress, 1950-2000.
- ・ Board, C. M. (n. d.). Annual report of China Medical Board of New York. China Medical Board of New York.

MEMO

医学中央雑誌にみる恩賜財団済生会 100 年（第 3 報）

済生会川口総合病院 図書室 高崎千晶、済生会図書室連絡会

1. 目的

社会福祉法人恩賜財団済生会（以下、済生会）は、2011 年に創立 100 周年を迎えた。それを記念し、2010 年に発足した済生会図書室連絡会の有志で、済生会の設立から現在に至るまでの業績調査を開始した。

業績をまとめた後は、新たな 100 年に向けて、医療および医療情報提供サービスの質的向上を目指す資料とする。また、国内最大の医学論文データベースである医学中央雑誌を用いることによる検索スキルの向上も狙いとした。

2. 方法

1903 年から 1982 年分は医学中央雑誌（冊子体のハンドサーチまたはデジタルアーカイブ。8 巻から 413 巻）、1982 年から現在分は、医中誌 Web を検索する。検索したデータを抽出・分析し、時系列の年表を作成し、考察を加える。

3. 本研究の現状

1811 年の創立から大正に至るまで、医学中央雑誌で済生会の記事をいくつか発見し、第 28 回医学情報サービス研究大会にて第 1 報、赤十字・済生会合同研修会にて第 2 報として報告した。現在は昭和期の検索を続行している。

共同研究者が各地にいるため、メーリングリストだけではなくオンラインストレージも利用し、情報共有を図っている。

4. 今後の展望と課題

済生会は、貧しく医療を受けられずに死にゆく人々を憂えた明治天皇の勅語によって創設され、生活困窮者を医療で救うという使命のもとに 100 年以上の歳月を歩んでいる。研究を通じ、済生会の歴史と使命の重みを実感している。調査の完成を目指すとともに、済生会にまつわるエピソードも広く伝えていきたい。

MEMO

研究業績データベース学外公開のプロセス

東京女子医科大学図書館 山岸なおみ

1. はじめに

東京女子医科大学（以下本学）では、2011 年に研究業績データベース（以下業績 DB）を構築し、同年 12 月に大学のウェブサイトで学外へ公開した。その際、図書館内に事務局が設置され、図書館の新たな仕事として運用を担うこととなった。導入から学外公開を経て、現在に至るまでを報告する。

2. 導入の経緯

業績 DB 以前は、図書館の下部組織である学会室が研究業績集を年刊で発行していたが、業績の収集・編集に多大な労力を要し、期日発行が困難になりつつあった。一方、文部科学省の方針により 2011 年には研究業績のウェブ公開が実質的に必至となった。両者の解決のため、公開可能な業績 DB を選定し、導入を決定した。

3. 導入から公開まで

2011 年 2 月に業績 DB の導入が決定したが、震災の被害によりサーバ設置は 5 月にずれ込んだ。6 月には学内関係部署との作業部会が立ち上がり、そこで仕様案の提示と確認を繰り返し、人事データ提供等の協力体制を確立した。8 月には学会室で収集済みの 2009 年研究業績データを移行、9 月には各講座への入力説明会を行い、2010 年度の研究業績の入力開始となった。11 月に学内向けに講座ページをテスト公開、12 月 28 日に学外に公開した。

4. 仕様の継続的な検討と運用

本学では、公開用ページを講座単位とし、業績数の集計も講座ごとの表示とした。また、データ入力は、研究者本人または講座代行入力者が行うこととした。

2012 年以降も、入力の利便性向上、より正確なデータ入力の推進、講座評価への対応、公開ページの充実など、毎年細かい見直しを行っている。図書館業務との関連では 2012 年に機関リポジトリ Twinkle との連携を開始し、業績リストから本文公開までの流れを作った。

5. 今後の課題

業績 DB は学内外の評価に関係するため、質の確保が不可欠である。なるべく労力をかけず正確なデータ入力が可能になるよう改訂を続け、研究者の入力意欲を高めるべく努めている。

また、大学全体に関わる業績 DB の事務局が図書館に置かれたことで、図書館が学内他部署と連携し、主体的に活動することを求められた。これに関してはまだ手探りの部分も多いが、図書館業務で培ったスキルを活かしつつ、地道に努力していきたい。

MEMO

信濃町メディアセンターにおけるコレクション管理：増えゆく蔵書への対応

慶應義塾大学信濃町メディアセンター 吉沢亜季子

1. はじめに

信濃町メディアセンターは、1937 年に北里博士記念 医学図書館として当時約 20 の教室医局に分散していた雑誌と図書約 3 万冊を集め開館した。その時代から 77 年を経て、現在では雑誌約 30 万冊、図書約 13 万冊を所蔵している。限られた収容規模の中で、増えゆく蔵書にどう対応するかは、どの図書館でも抱える尽きることのない課題であるが、当館でも将来に向けた永続的な利用を見据えた運用を検討しなければならない時期にきている。蔵書増大による書架不足の対応に着手したのは 20 年前の 1994 年であるが、この間の移動と除籍、また電子ジャーナル拡充による課題等、現在の状況を含め報告する。

2. 資料の移管：デポジットライブラリーの活用

慶應義塾大学メディアセンターには 2 つの共用保存書庫（横浜市の白楽サテライトライブラリー、山梨県都留市の山中資料センター）があり、そこに 6 地区の蔵書が保管されている。当館では 1993 年以前の製本雑誌約 15 万冊と 1985 年以前の図書約 5 万冊を移管しており、主にファックスによる文献複写で利用に供している。また、先に述べた白楽は 2015 年末に契約を終了する予定で、それに替わる山中第二棟の建設が進行中である。竣工の暁には、更に数万冊の資料を第二棟へ動かすことを計画している。

3. 資料の除籍―他地区との重複整理と電子ジャーナルについて

当館の所蔵雑誌約 8,700 タイトルのうち、他地区との重複雑誌は約 1,300 タイトルある。今年度に入り、自然科学系学部（医・薬学・理）のメディアセンター間で重複調整を行い、所蔵範囲の広い地区への移管による欠号補充と重複分の除籍で所蔵の一本化を実現した。また、電子のバックファイル契約により将来的なアクセスが保障されている 1990 年代のバックナンバーの除籍をも進めた。一方で、電子ジャーナルの価格高騰による契約中止もあるので、単純な電子一本化にはリスクが伴い、除籍には多面的な検討と慎重な判断が求められる。各タイトルの状況に応じて、利用に不都合が生じないように処理を進めている。

4. 資料の保存―より良いサービスの提供

資料の形態が大きく電子へと傾き利用の動向も変化している中で、資料の除籍に目を向けがちであるが、資料の保存についても考えてみたい。特に年代の古い学会誌等には、既に入手が困難となっているものも多く、中には仮置き場所が不適切だったために劣化が進んでしまった例もあるので、保存環境には十分な配慮が必要である。信濃町メディアセンターには、「新しいもの」と「古いもの」が整然と共存する姿がある。最先端医療から医学・医療史に渡る幅広い研究の支援に取り組めるよう、過去の教訓を踏まえ将来の姿を描きつつ資料保存という使命についても考えを巡らせてみたい。

MEMO

新しい世代の図書館を目指せ!：東京医科大学図書館本館の新築移転事例報告
東京医科大学図書館 高畑亜紗美

東京医科大学図書館は、本館（西新宿キャンパス）、分館（新宿キャンパス）、茨城医療センター分館（茨城）、八王子医療センター分館（八王子）の 4 つの図書館で構成されている。図書館本館は、昭和 32 年から地上 4 階地下 1 階建ての独立建物の図書館として利用されてきた。このたび本学創立 100 周年記念事業の一環として、教育研究棟（自主自学習館）新築に伴い、その 2 階フロアに移転した。平成 25 年 9 月 2 日より、新図書館としてオープンした。

引越しに伴い所蔵資料の移動、新設備の導入、また時を同じくして持ち上がった保存書庫として利用していた扇山キャンパスの売却も決まり、蔵書の一部を他キャンパス分館や学外倉庫へ移動、除籍を行うこととなった。

■移転準備

- ・BDS 納品業者に IC タグ貼付を委託（7 万冊）
- ・引越し業者との打合せ、書架移動の指示、実施
- ・24 時間開館に向けての準備

■移転作業

- ・平成 25 年 8 月 19 日～8 月 31 日までを、引越しのため休館とした
- ・相互貸借業務は平成 25 年 8 月 1 日～9 月 18 日の間は休止とした
- ・キャンパス内重複受入雑誌の整理・移管・除籍を行い書架スペースの確保を図った
- ・雑誌配架をヘボン式から訓令式へ変更し、単行書・雑誌とも和洋混配の配架へと変更した

■新図書館設備、運用

- ・24 時間開館の実施
- ・自動貸出・返却機の導入
- ・IC タグでの蔵書管理
- ・コピー機、プリンターの IC カード（交通系カード）での料金清算
- ・教職員が利用できる個室を設置
- ・DVD ブースの設置
- ・電動書架の導入

■開館後の状況と課題

- ・利用者マナーの見直し
- ・防災・災害マニュアルの整備

MEMO

信州大学附属図書館における、夜間・休日開館中の臨時閉館の決定と周知について

信州大学附属図書館中央図書館 折井 匡

ヘルスサイエンス情報専門員（上級資格）

1. 現状と目的

信州大学附属図書館は、長野県内に 6 つの図書館があり、松本キャンパス内に中央図書館がある。どの図書館も休日開館や夜間開館を行っており、その時間帯は、原則として正規の職員は不在である。各図書館には地震などで大震災が起きた場合の、避難方法のマニュアルがある。

昨年台風が直撃に近い形で、大雨をもたらして通過した。2 月には数十年ぶりに、数日間バスの運行が止まるほどの大雪に見舞われたが、附属図書館に臨時休館規程が無いことから、閉館としなかった。利用者及び勤務中の職員の安心安全の観点から、どんなタイミングで臨時休館を判断するかについて、附属図書館としての規程制定の必要を感じた。

2. 他大学の状況調査

全国の国立大学法人図書館の状況をメールにて調査した。

平成 25 年 1 月 12 日～22 日調査 臨時閉館の経験は過去 3 年間とした。

①調査対象：91 図書館へ送付、61 館から回答あり（69%）

②臨時閉館について 規程あり 16 館

規定に基づき臨時閉館の経験あり 14 館 1 回～7 回（平均 3.36 回）

③臨時閉館について 規程なし 45 館

規定は無いが、臨時閉館の経験あり 34 館 1 回～12 回（平均 2.6 回）

④臨時閉館の決定者 館長 31 館 事務長 12 館 リーダー等 15 館

⑤臨時閉館の広報方法 ○図書館HP ○入口へ掲示 ○twitter ○facebook

臨時休館を行う場合は、現場の担当者や非常勤職員は、上司からの指示を仰いで臨時休館としている。

図書館が独自に臨時休館規程を作っているのは、千葉、名古屋、京都、などの 9 館。その内容は全て「警報」が発令されるか、発令が予想される場合において、休館を事前に告知する方法であった。規程はどの段階になったら開館とするのか、という手順書であった。

3. 信州大学附属図書館の規定制定に向けて

「警報が出た・警報が出そう」との事での臨時休館を実施は想定していなかった。しかし大雨や大雪が降ってから休館は遅い。そして警報が解除されたら速やかに開館するほうが合理的であることから、「警報が出たら休館する」と言うことが利用者に周知されていれば、「図書館へ行ったら休館だった」という事態が避ける事ができる。

現在規程制定に向けて、学内の法規担当部局にて精査しているが、図書館原案は広報せずとも、臨時閉館である事がわかるような規程案としている。

MEMO

愛知医科大学における看護系利用者の段階的行動と指標の可能性

福武亨¹，小林晴子²^{1,2} 愛知医科大学医学情報センター（図書館）² ヘルスサイエンス情報専門員（上級資格）

1. はじめに

情報流通の現場である図書館は利用者行動を把握し適切な情報提供を行うことが求められる。そこで利用者行動の流れを一般化し，図書館業務における評価指標について考察した。文献引用に至るまでの過程は，その関心の程度とそれに応じた「文献の検索」「文献の閲覧」「文献の保存」という段階的行動によって大分することができる。そしてそれらの行動に応じた利用データから本学の傾向をみることができた。

2. 方法と結果

本研究では，先行研究に基づき，文献引用以前の利用者行動について段階的に単純化した。そのうえで愛知医科大学の看護系利用者，看護系ジャーナルを対象に，2013 年 4 月から 2014 年 3 月まで，段階ごとにデータベース等のログから利用者行動の測定を行った。またログで不明な部分はアンケートを実施し補足した。

「文献の検索」について，主に医中誌 Web のログと CINAHL のログを利用した。「文献の閲覧」について，電子ジャーナル，OPAC，ILL 等への中間窓であるリンクリゾルバのログを利用することで，検索結果から全文入手までのステップについて測ることができる。ナビゲーションメニューの表示回数が 100 回以上であった雑誌は 84 誌あり，そのうち看護系雑誌は 39 誌あったが表示回数におけるフルテキストリンクや文献複写依頼等へのリンクをクリックした割合が 50%を超えたものは全体の 39 誌中 16 誌であった。「文献の保存」について，文献管理ツール RefWorks のログを利用した。結果から看護系利用者が最も保存している雑誌を把握できる。結果によると，看護系利用者が 50 件以上保存した論文を掲載している雑誌は『ナースিং・トゥデイ』『小児看護』『看護展望』であった。そのうち『ナースিং・トゥデイ』は，ナビゲーションの表示回数におけるフルテキストリンクや文献複写依頼等へのリンクをクリックした割合が 90%で、『小児看護』はナビゲーションメニュー表示が 162 回と高かったものの割合は 25%と低かった。『看護展望』についても 76 回で 21%であった。

3. 考察と結論

「文献の閲覧」において，ナビゲーションメニューの表示回数が多くても電子ジャーナル等へのクリック数が少なく，検索した論文が関心のものでなかったり，不必要であったり，ということが考えられた。一方で『ナースিং・トゥデイ』にみられるように，「文献の検索」「文献の閲覧」「文献の保存」の数の差が少ない結果もみられた。このように図書館において，データベース等のログをとることで，より看護系利用者の細かな行動の流れに着目することができる。この流れについて，どのようなものが理想的であるかは課題であるが，看護系利用者のモデルを設定した上で指標を作成することで利用者講習会といった研究支援に役立てることにつながるだろう。

MEMO

患者図書室のための新聞医療記事分類・評価の試み
佐藤 正恵（司書／ヘルスサイエンス情報専門員上級）

1. 研究の背景

病院図書室は、医療法第 22 条において地域医療支援病院に設置が定められた施設¹⁾である。さらに、がん対策基本法²⁾等により、各地の病院で患者図書室が設立されており、患者自身や援助者（以下、利用者）が健康情報・医療情報を入手しやすい環境が整ってきた。

一方で、医療教育経験のない利用者がエビデンスある医療情報に速やかに到達し、解説書や診療ガイドラインを読み解き、さらに医学文献を理解することは多くの場合困難を伴う。その点、親しみやすさや情報の新鮮度からみて、新聞記事は重要なコンテンツの一つであるが、2012 年 10 月 11 日付読売新聞 iPS 細胞臨床応用の誤報など、エビデンスに乏しい記事も存在する。

筆者は急性期病院の医学図書館司書として、患者図書室にて新聞記事（全国紙 3 紙＋地方紙 1 紙）のクリッピングとスクラップを行っている。利用者や医療従事者への情報提供を行う上で、そもそもの新聞医療記事の量、カテゴリーと記事内容の信頼性をどのように把握すべきかが課題となっていた。先行研究では特定テーマでの検討や歯科分野での数量調査³⁾があるが、医療・健康情報記事全体の数量調査は未見である。

2. 研究の目的

本研究では、日本語の医療・健康情報に関する新聞記事を抽出し、量的調査およびカテゴリー化することで、患者図書室における情報提供の効率化ならびに利用者の情報選別への利便性寄与を目的とする。

3. 調査対象・方法

日本国内で発行された新聞の医療・健康情報を一定期間収集し、カテゴリー分類と数量調査を行う。本研究では以下の新聞記事を対象とし、今回は予備調査の結果を報告する。

- ・調査期間：2014 年 10 月（予備調査）2014 年 11 月～2015 年 10 月（1 ヶ月ごとに集計する。）
- ・全国紙 3 紙（日経・読売・朝日）朝／夕刊＋地方紙 1 紙（千葉日報）掲載記事
- ・データベース「日経テレコン 21」「聞蔵 II」は引用確認等の補助的に用いる。
- ・記事分類カテゴリー（案）：啓蒙・解説（記者、医療者等）、報道（医療政策）、報道（社会面）、インタビュー、患者（闘病記）、論文・学会発表、調査（手術件数等）
- ・さらに啓蒙・解説記事については、記事評価のツールとして豪・米・加・日で使用されてきたメディアドクター指標の日本語版⁴⁾を用いて評価を行う。

4. 参考文献（Web サイトはすべて 2014/9/22 アクセス）

- 1) 医療法 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23H0205.html>
- 2) がん対策基本法 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18H0098.html>
- 3) 岡田靖雄. 新聞記事の分析 精神疾患を中心に. 日本社会精神医学会雑誌 23(2):104-111, 2014. ほか
- 4) メディアドクター研究会 <http://mediadoctor.jp/>

MEMO

システマティック・レビューにおいて検索に用いられるデータベース：
Cochrane Database of Systematic Reviews の分析結果から

佐山 暁子
東邦大学医学メディアセンター

1. 背景と目的

システマティック・レビューは、ある特定のトピックについて、世界中で行われている研究を網羅的に検索・収集し、選定基準に沿って選別し、内容を分析・統合化したものである。医学分野でも多数のシステマティック・レビューが出されているが、なかでもコクラン共同計画のレビューグループによって作成されるものはコクラン・レビューと呼ばれる。これらは The Cochrane Library に収録されており、質の高いエビデンスを探すのに不可欠なツールとなっている。本研究では、The Cochrane Library に収録されているシステマティック・レビュー (CDSR) を対象に、検索に使用されたデータベースの種類を分析し、システマティック・レビューに用いられるデータベースの動向を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

コクラン共同計画作成のシステマティック・レビュー (CDSR) のうち 2014 年 1 月 (Issue1, 2014) と 7 月 (Issue7, 2014) に収録された 143 件を調査対象とする。各 SR において、「方法」に記された“Search methods for identification of studies”の箇所に検索方法の詳細が記載されている。ここから、検索したデータベースの種類、データベース以外の情報ツール、検索手段などを抜き出し分析する。

3. 結果と考察

調査中のため、結果と考察の詳細は研究会当日に発表させていただく予定である。調査対象とした CDSR は、コクラン共同計画作成のハンドブックに沿って作成されているが、今回の調査結果を、そのハンドブックや、過去の先行調査と比較対照することで、現状を分析したい。臨床試験や医学論文を検索するデータベースの整備状況を確認したり、システマティック・レビューにおける、情報検索の戦略を立てる際の参考になると考えられる。

※参考文献：

- ・河合富士美ほか. Systematic Review に使用されるデータベースの動向：Cochrane Database of Systematic Reviews の分析から. EBM ジャーナル. 2004;5(6):734-7
- ・野添篤毅, 榊原真奈美. メタ・アナリシスにおける文献検索プロセスと主題傾向分析. Journal of Library and Information Science. 2007;20:1-12

MEMO

Nature Publishing Group の AOD サービス分析

橋本郷史

東邦大学医学メディアセンター

I. はじめに

東邦大学では 2013 年度に購読雑誌の見直しを行った。その際、新規購読希望も調査したところ、Nature Publishing Group (NPG) の電子版雑誌の購読希望が多くあることが分かった。一方で、雑誌価格の値上がりに加えて極端な円安となったため、現契約の維持と新規希望を両立させることは難しい状況であった。そこで、予算規模を拡大せず利用可能な雑誌を増やすことを実現するため、2014 年 1 月より、NPG の雑誌(印刷版、電子版)のほとんどを購読中止し、かわりに、論文単位での従量制アクセス権 (Articles on Demand : AOD) を導入した。

本調査では、AOD サービスの評価を試みた。特に、これまで購読していた雑誌と新規購読希望のあった雑誌の、利用状況とコストパフォーマンスとに注目して分析を行った。

II. 対象と方法

本調査では 2014 年 1 月から 2014 年 7 月までの AOD アクセスログを使用した。ログに含まれている論題、雑誌名、論文出版年、利用日等の情報を集計した。AOD 対象誌は、NPG が発行する 86 誌である。但し、継続して電子版を契約している Nature(本誌 1997 年以降、及び Nature Digest を含む)、Kidney International、American Journal of Gastroenterology の 3 誌は対象外となる。

III. 結果

2014 年 1 月から 2014 年 7 月までの AOD 利用回数は 3639 回であった。このうち購読希望があった 18 誌の AOD 利用は、1958 回であった。冊子の購読を中止した 25 誌の AOD 利用は 1585 回で、そのうち 2014 年論文の利用は 606 回であった。電子版の契約を中止した 7 誌の AOD 利用は 564 回だった。但し、7 誌中 1 誌は AOD 利用が見られなかった。

IV. 考察

購読希望があった 18 誌の AOD 年間利用回数は約 3400 回と推定される。個別契約した場合に比べ、AOD のコストは 1/3 となる見込みである。冊子の購読を中止した 25 誌の 2014 年論文の AOD 年間利用回数は約 1000 回と推定される。冊子購読を維持した場合に比べ、コストは 1/5 で済むと見込まれる。また、これら 25 誌の印刷版の利用は年 150 回程度だったが、AOD では年間約 2700 回の利用となる見込みである。電子版の契約を中止した 7 誌の AOD 年間利用回数は約 1000 回と推定される。これら 7 誌の電子版契約を維持した場合に比べ、AOD のコストは 1/4 に抑えられる見込みである。

V. 結論

AOD 利用のほうが、全体として変更前の契約形態よりもコストパフォーマンスが高い。AOD ではアーカイブできないデメリットがあるが、契約金額を維持したまま、利用できるタイトルを増やすことは達成できていることがわかった。また、冊子体と比較した利用回数は大幅に増加しており、潜在的利用ニーズにも応えることができるようになったと評価できる。AOD に切り替えたことで、今まで以上に利用の実態が分かり、契約判断の材料が増えた。この結果を今後の契約に活かしたい。

MEMO

自作 SUSHI クライアントによる電子ジャーナル利用統計取得業務の改善
埼玉医科大学附属図書館 廣瀬 洋

1. 背景

本学では電子ジャーナル（以下 EJ）をパッケージ 10 種、単品 171 誌の計 5,799 誌購読している（2014 年 3 月 31 日時点）。これらの統計を取得する際にアクセスするベンダーのサイトは 55 サイトあるが、そのうち 43 サイトで自ら統計を取得できる。

これらの 43 サイトに順次アクセスし、ID・パスワードを入力し、Usage Report に類する箇所を探し、統計を入手して、複数サイトの結果を一つの表にコピー&ペーストしてまとめるという一連の作業には時間がかかる。他の業務をしながらではあるが約 3 日を費やした。これでは非効率的であるため、EJ の利用統計取得業務を改善できないか検討した。

2. 方法の検討

業務の改善を行う上で 2 つの案を検討した。1 つ目は各サイトを巡回せずに統計を取得する方法として、月初めにサイトからメールを送るよう設定することを考えた。これは統計が取得可能となった時点でサイトの URL を送付されるものと、統計が HTML で送付されるものであった。URL を知らされるだけではサイトを巡回していることと変わらない。また、HTML での送付は 1 つにまとめづらい形式の表だった。そのため、この案は不採用とした。

2 つ目は本学で導入しているリンクリゾルバ SFX に付属の統計ツール UStat を使用する案である。このツールを調査したところ、ツールが対応していないベンダーのサイトの存在を確認できた。そのため、UStat を使用する案を残しつつ、ツールで用いられている SUSHI (Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative) について調査することとした。

3. SUSHI の調査および方法の決定

統計を取得できる 43 サイトのうち、36 サイトが SUSHI に対応していた。また、UStat 以外の SUSHI クライアントツールを調査したところ 5 つのツールを確認できたが、著者の知識不足もあり、すべて利用しづらいものであった。そのため、SUSHI クライアントをプログラミング言語 Python にて作成し、UStat と比較を行った。

4. 結果

SUSHI に対応している出版社 36 サイトのうち、UStat で統計を取得できたのは 19 サイトであった。一方、自作 SUSHI クライアントでは 34 サイトで統計を取得できた。34 サイトの統計を取得するのにかかる時間は約 27 分であった。

これまで手動で行っていた 43 サイトの利用統計取得業務のうち、34 サイトを自動で取得できるようになった。約 79%の手作業を削減できたことになる。

MEMO

第 2 1 回継続教育コース

継続教育コース 1

「文献検索演習 中級編」

医中誌Web：講師 大屋玲奈氏
(獨協医科大学図書館)

PubMed：講師 小嶋智美氏
(個人会員)

継続教育コース 2

「科学におけるモラルを考える」

演題 「論文執筆から発表倫理を考える」

講師：山崎茂明氏
(愛知淑徳大学人間情報学部教授)

演題 「質的研究における研究者のモラル

ー真実性と転移可能性の確保ー」

講師：萱間真美氏
(聖路加国際大学看護学部教授)

期日：2014 年 11 月 19 日 (水)、21 日 (金)

会場：聖マリアンナ医科大学 病院講堂

継続教育コース プログラム

期日：2014 年 11 月 19 日（水）、21 日（金）

会場：聖マリアンナ医科大学 病院講堂

●11 月 19 日（水） 継続教育コース 1 「文献検索演習 中級編」

- 13:15 開場・受付
- 13:40～15:00 医中誌Web：講師 大屋玲奈氏（獨協医科大学図書館）
- 15:00～15:15 ＜休憩＞
- 15:15～16:45 PubMed：講師 小嶋智美氏（個人会員）
- 16:45～17:00 修了証書授与

●11 月 21 日（金） 継続教育コース 2 「科学におけるモラルを考える」

- 9:00 開場・受付
- 9:30～11:00 演題「論文執筆から発表倫理を考える」
講師：山崎茂明氏（愛知淑徳大学人間情報学部教授）
- 11:00～11:15 ＜休憩＞
- 11:15～12:45 演題「質的研究における研究者のモラル
－真実性と転移可能性の確保－」
講師：萱間真美氏（聖路加国際大学看護学部教授）
- 12:45～13:00 修了証書授与

「文献検索演習 医中誌 Web」

獨協医科大学図書館

大屋 玲奈

「調べる」という行為がインターネットを通して手軽に行われるようになった。Google などのサーチエンジンは何かしらの単語を入力すれば即座に何万もの結果を表示する。かつては特殊な利用環境を要し、ツールの操作に多くの専門的な知識を要した文献検索であるが、インターネットや情報技術の進歩とともに、現在は多くがインターネットを介して提供され、シンプルな検索画面上で、何かしらの検索語を入力し、検索ボタンをクリックするというまさにサーチエンジンを検索するかのような簡便な操作で行うことができる。しかし、文献情報データベースには検索を適切かつ効率的に実行するための様々な機能が備わっている。エンドユーザーの代行検索や授業や講習会において利用指導を行う機会がある図書館員としては、検索語を入力する、組み合わせるという知識だけでは不十分であろう。情報ニーズを分析し、モレの少ない検索をするのか、ノイズの少ない検索をするのかなど目的を定め、戦略的に検索を行わなければならない。そのためには、検索の基本的な知識を有するとともに文献情報データベースのもつ特徴や様々な検索機能について理解する必要がある。

今回取り上げる「医中誌 Web」も前述のようにインターネットを介して利用可能な文献情報データベースのひとつで、医学や看護、薬学の図書館員や医療従事者にとっては日々の業務に不可欠なツールである。2011 年には ver.5 がリリースされ、画面が一新し、より検索機能が強化された。今回の演習では、履歴検索、絞り込み検索、検索結果の見方といった医中誌 Web の操作に関する基本的な知識があることを前提に、「シソーラス」「自動マッピング」「副標目」「研究デザイン」等を取り上げ、これらの概要や特徴、医中誌 Web における検索機能の使い方を紹介するとともに、検索例題や演習問題をあげ、実際に医中誌 Web 検索することで、実践的に学んでいくことを目指す。

<参考資料>

1. 原田 智子, 岸田 和明(1964-), 小山 憲司. 情報検索の基礎知識. 情報科学技術協会, 2011
2. 時実 象一, 小野寺 夏生, 都築 泉. 情報検索の知識と技術: 情報検索応用能力試験 2 級対応テキスト. 新訂, 情報科学技術協会, 2010, ix, 268pp.
3. 諏訪部 直子, 平 紀子. わかりやすい医中誌 Web 検索ガイド. 日本医学図書館協会

MEMO

文献検索講習中級編：PubMed

小嶋 智美

Independent Librarian

■本講習の位置づけ

NPO 法人日本医学図書館協会（JMLA）の主催する文献検索講習は、保健・医療分野の情報サービスに必要な検索の知識とスキルの習得を目的に、ベーシック・アドバンスト・プロフェッショナルという 3 段階のレベルに分けて実施されています。

本講習は、第 2 段階のアドバンスドレベルに該当します。

■本講習の目標

ベーシックレベルの内容に以下を付加して、よりの確な検索ができることが目標です。予習は必要ありません。会場で共に学び、現場での実践と研鑽につなげましょう。

- 1 Medical Subject Headings（MeSH）の理解と活用
 - 1.1 MeSH の仕組みと構成，用語の種類
 - 1.2 MeSH の探し方と使い方
 - 1.3 MeSH による検索でできること・できないこと
- 2 的確な PubMed 検索のための知識・機能・技術
 - 2.1 検索式の作成と実行・検索結果の評価
 - 2.2 効率よく検索するための機能とコツ
 - 2.3 知識・技術を向上させるためのコツ

■受講までの準備（任意）

ベーシックレベルで習得する以下の内容については、受講前に確認しておきましょう。

- 1 文献検索の基礎知識
 - 1.1 ブール演算子（AND, OR, NOT）
 - 1.2 シソーラス（統制語）とは
- 2 PubMed の概要と基本操作
 - 2.1 基本情報・画面構成
 - 2.2 キーワード検索・履歴検索・フィルターによる絞り込み
 - 2.3 書誌事項の見方と結果の保存方法

■そのほか

- ・ 講義には演習が含まれます。近くにいる他の参加者と協力して行いましょう。
- ・ 診療ガイドラインやシステマティックレビュー作成のための検索について学びたい方は、プロフェッショナルレベルに該当する「文献検索講習会 上級」（上級編）の受講をおすすめします。上級編では医学研究と主題の知識を前提に、アドバンスドレベルまでで習得する知識・技術を活用します。

MEMO

論文執筆から発表倫理を考える

山崎茂明

愛知淑徳大学人間情報学部

蓄積された研究情報が、現代社会の知識基盤を支えている。論文として定着された知識は、エビデンスを強化し、サービスやシステムの改良につながるだけに、専門的な職業人はリサーチと論文発表に尽力し、そのためのメディアを発展させる必要がある。

研究者は、研究の着想やデザインから、データ収集と分析をへて、さらに考察を加え、最終的に成果を論文にまとめる。論文には再現性を保証する上で必要な情報が記載され、結果の信頼性が担保される。論文発表を通して、研究成果は専門領域の進歩に寄与し、信頼できる知識として社会へ応用されていく。発表なくして、科学研究活動は完結しないだけに、発表倫理 (publication ethics) に焦点をあてることで、研究プロセス全体の公正さをチェックできる。

研究倫理は、生命科学領域において、1960 年代から 1970 年代に、動物やヒトを対象にした生命倫理 (bioethics) として考察され、1980 年代になり研究者自身の行動に焦点をあてた研究者倫理や研究行動の公正さという視点が加えられた。研究倫理といえば、ヒトや動物を対象にした問題を思い浮かべるが、研究者の発表プロセスに着目して、研究行動の倫理性や公正さを検討する発表倫理の視点がある。契機は、1980 年代以降に頻発し関心を呼んだ科学者の不正行為 (scientific misconduct) 事件である。

発表倫理の中心テーマは、オーサーシップとレフェリー・システムであり、研究倫理教育プログラムにおいてもコアに位置づけられる。オーサーシップは、研究成果への責任を公言することからはじまるだけに、正しい理解が求められる。しかし、その定義は各研究室のローカル・ルールに基づき、国際的な定義が普及していないのが現状である。レフェリー・システムの再構築も求められ、審査時の匿名性を廃したオープン・ピアレビューなど検討課題である。医学情報専門職にとり、発表倫理の知識は、論文執筆や書き方、さらに情報検索や論文読解などに役立つものであり、積極的な理解と普及に寄与していく必要がある。

MEMO

質的研究における研究者のモラルー真実性と転移可能性の確保ー

萱間 真美 聖路加国際大学 看護学部

質的研究では、「信頼性」と「妥当性」に代わる研究の評価基準として、真実性 (trustworthiness)、転移可能性 (transferability)、信用可能性 (credibility)、適切性 (relevance) などの用語が用いられる。一般にインタビュー法や参加観察法などのフィールドワークを用いた研究手法を用いる質的研究方法では、主観的体験のナラティブというデータの性質が強調される。そのため、量的研究の用語でいう内的・外的妥当性や信頼性にあたる上記の評価基準については、「言わずもがな」であるという扱いになっている状況も見られる。

確かに、量的研究における再現性 (reproducibility) は、解釈を伴う質的研究では基本的に問われない。人の主観的体験をさらに研究者が解釈する質的研究には、厳密な再現性を求めるのではなく、解釈の普遍性が求められるからである。しかし、質的研究方法もまた、事実により、事実を記述するための科学的研究手法である。

Health Research の質を高め、透明性を確保するための国際的ネットワークとして **EQUATOR** (Enhancing the **QUAL**ity and **TRAN**sparency **OF** health **RE**search) は、英国 NHS の資金提供によって始まった、論文執筆や査読、編集の質を高めるための取り組みである。Annual Lecture による知見の共有、インターネット上のホームページでは各種の研究方法における論文作成や査読のためのガイドラインを検索できるデータベースがある。このネットワークの名称に、透明性 (Trans p arency) という言葉が用いられていることに注目したい。事実に向き合うためにどんな手順で、どのような解釈を通して結果が得られたかが示されていることは、どんな研究方法でも不可欠だ。

研究者の解釈だけが過度に強調され、事実が軽視されたとしたら、それは質的研究におけるミスコンダクトである。また、そのことによって、研究結果からは事実だけが持つ力や深みが失われ、結果の転移可能性 (一般化可能性) の幅が狭まることになる。事実ほど我々の先入観に鋭く切り込んでくるものではなく、それを裏切る、思いもよらない景色を見せてくれるものはない。事実への敬意を失ったら、研究者とはいえない。

質的研究においてデータの真実性 (実際に得られたデータとの齟齬がないこと) や透明性 (結果が導かれたプロセスが明確に示され、納得できること) を確保することは、研究参加者、論文の読者からの信頼に応え、そして事実だけが持つパワーを、私たちの日々の実践に役立てることに他ならない。講演では、EQUATOR や我々が作成した質的研究方法を用いた学位論文審査のためのガイドラインを紹介しながら、質的研究における研究者のモラルについて皆様とともに考える機会としたい。

MEMO

第 21 回医学図書館研究会・継続教育コース プログラム・予稿集

2014 年 11 月発行

編集・発行 第 21 回医学図書館研究会・継続教育コース実行委員会

事務局 〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 38
埼玉医科大学附属図書館
TEL 049-276-1416 FAX 049-295-9071

実行委員	中裕佳男	千葉県立保健医療大学図書館（実行委員長）
	田口宣行	埼玉医科大学附属図書館（事務局）
	木谷よし子	東海大学伊勢原図書館
	須之内理香	日本歯科医師会図書館
	小室沙絵	聖マリアンナ医科大学医学情報センター